

## 優秀賞

### 「違いに寄り添うこと」 青森県三沢市立第一中学校 3年 濱形 紗那

何事もなかったような顔をして毎日を過ごしている私には一つ、周りには知られたくない、隠したいことがあった。それは、

「日中ハーフ」。

私の母は中国人だ。つまり、日本と中国のハーフということだ。今、このような社会情勢の中で、どうしても差別されることがある。私が気にし始めたのは、3年前、新型コロナウイルスが流行した時だった。

私が小学6年生の時だった。私は日本人と中国人のハーフであり、見た目だけでは分からない。だから、誰にも知られていなかった。ある時、ニュースで「新型コロナウイルス」という言葉と「中国」という言葉が目に入ってきた。私は、少し嫌な予感がした……。

最初はみんな気にしていなかった。そんな様子が急変したのは、日本にコロナウイルスが流行し始めた時だった。私の予感は的中した。学校に行けば、「中国最低」だとか「さすが中国」とか「中国とは関わりたくないね。」など、笑いながら、みんなで楽しそうに話すのだ。私は空気を読んで、一緒に笑うことしかできなかった。心の中で、母に謝りながらも、こんなことをしている自分が腹立たしかった。

学校が終わって家に帰った私は、今日あったことを話すことができなかった。いつもとは違う私に異変を感じたのか、母は声を掛けてくれた。

「どうしたの？ 学校で何かあったの？」

心配そうに見つめる母に向かって、私は首をふる。

「いつも通りだったよ。」

口から出たのは、この言葉だった。もしかしたら、私は中国人の血が混ざっていることに恥を感じているのかもしれない。そういう思いが、さらに私を苦しめた。

私は、この苦しみから解放されたかった。楽に生活したいと思った。だから、友達に中国人とのハーフだということを打ち明けた。しかし、それは失敗だった。次の日には、そのことがクラス中に広まっていた。そして、とうとう、

「中国人には近づくな。」

そう言われた。悔しさが込み上げてきた。ただ中国人の血が入っているだけで、みんなとは何も変わらないのに。そう言われることが悔しかった。でも、私は

耐え続け、ついに卒業。中学でもこんな日々を過ごすのかと憂うつだった。私は、新しい友達に「中国人とのハーフ」であることを打ち明けた。

「え？ そうなの！ めっちゃうらやましい！ 二つ自分の国があるってことだね。」

そういう言葉が返ってきたのだ。

私は苦しみから解放されたように体が軽くなった。そのままの自分を認められた気がした。

現在の社会では、多様性という言葉をよく耳にする。年齢や性別、国籍などが違う多種多様な人々がこの社会にいる。しかし、そのことに気付かず、自分の周りがすべてと誤ってしまい、それ以外のものを排除までしてしまい、人を傷つけてしまうのだ。自分やその周りだけが全てだとは思わず見ることで新しい世界が広がるのではないだろうか。

私もそうだった。

「ハーフ」は「半分」という意味にとらえられる。しかし、友達の「二つの国を持っている。」という表現で、マイナスにとらえていたものをプラスにとらえることができた。そして、大好きな母の国を大事に思えたのだ。

私は、将来中学校の教師になりたいと思っている。自分と同じような体験をしてしまう子どもがいない社会づくりに貢献するため、中学校の教師になって、子どもたちに伝えていきたいことがあるからだ。自分にはそれができると思う。今の社会では外見ではわからない障害や外国に対しての偏見から生まれる差別がある。もしかしたら、私たちが気付いていないところで悩みを抱えている人もいるのかもしれない。だからこそ、このような体験をした私なら助けを求めている人たちを理解し、声を掛けることができるはずだ。

そのためには、自分が感じたつらさも、声を掛けられたときのうれしさも心にしっかりと刻んでいきたい。多様性を認め、多様な子どもたちの気持ちの状況に寄り添える教師にいつかなれるように。